"学ぶ"に寄り添う
コミュニケーションマガジン

社内報アワード
受賞

NEWS LETTER
SEIGAKUIN NEWSLETTER

& Seig

No.
289
Dec.2024

特集

聖学院高校GIC
その根幹にリベラルアーツあり

GICの独自科目を紐解く
Next Talk
ーリベラルアーツの本質を継ぐものー

聖学院中高教員による
STEAM、イマージョン、
プロジェクトの独自科目解説

巻頭座談会

聖学院中高学校長と
リベラルアーツ担当教員と
GICの生徒3人による
トークセッション

各校・各園在校生インタビュー
輝く人たち
女子聖学院中高
高校1年生 生徒会役員会

関係団体の皆さんにインタビュー
支える人たち
NTTアドバンステクノロジ株式会社
小見山 崇さん

第5回 聖学院SDGsコンテスト
フォト&ムービー部門
受賞作品発表

& Seig NEWS LETTER

SEIGAKUIN NEWSLETTER

No. 289 Dec.2024

CONTENTS

特集
01_ **聖学院高校 GIC**
ーその根幹にリベラルアーツありー

聖学院中高学校長と
リベラルアーツ担当教員と
GIC の生徒 3 人による
トークセッション
03_ &Talk

聖学院中高教員による
STEAM、イマージョン、
プロジェクトの独自科目解説
07_ Next Talk
ーリベラルアーツの本質を継ぐものー

各校・各園在校生インタビュー
11_ **輝く人たち**
［女子聖学院中高 高校 1 年生 生徒会役員会］

関係団体の皆さんにインタビュー
12_ **支える人たち** ［小見山 崇さん］

13_ Seig NEWS

18_ 第 5 回 聖学院 SDGs コンテスト
フォト&ムービー部門
「教えて あなたの SDGs ー環境について考えようー」
受賞作品発表

120年の轍を歩む
19_ 聖学院歴史探訪 特別編
ニーバーの祈り

聖学院ニュースレターアンケート

二次元コードから本誌の感想をお寄せください。アンケートに回答いただいた方の中から抽選で 10 名様に「聖学院オリジナルグッズ」をプレゼントいたします。プレゼントの内容は当たってからのお楽しみ！いただいたご意見は、編集の上、本誌にてご紹介させていただくことがあります。

●有効回答期間　2024 年 12 月 19 日～ 2025 年 2 月 14 日
●当選発表　当選者にはメールにてお知らせします。

本アンケートに関するお問い合わせ
聖学院広報センター Tel 03-3917-8530

編　　集／学校法人聖学院 広報センター
デザイン／株式会社キュー・ジー
発 行 日／2024 年12 月20 日

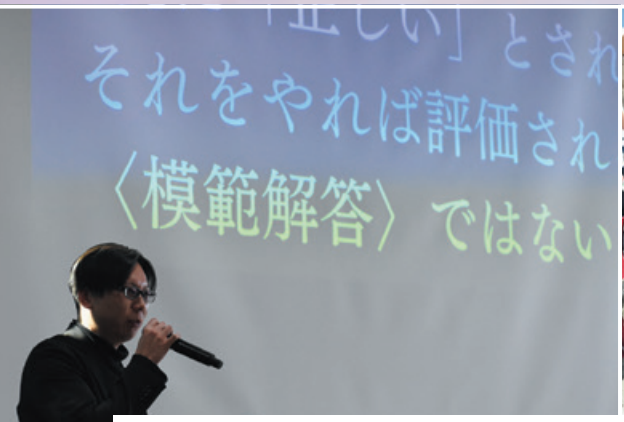
特集

聖学院高校GIC

― その根幹にリベラルアーツあり ―

2021年4月、聖学院中学校・高等学校（以下聖学院中高）に高校の新しいクラスが誕生しました。「ものづくり」「ことづくり」を通して世界に貢献できる人を育てる、グローバルイノベーションクラス（GLOBAL INNOVATION CLASS　以下GIC）です。「Liberal Arts（以下リベラルアーツ）」「Immersion（以下イマージョン）」「STEAM」「Project（以下プロジェクト）」の4つの独自科目を組み込み、全く新しいカリキュラムを構成しています。「世界に貢献できる」という視点から英語をツールとして使えることを目指していたり、大学の卒業研究のような最終成果が求められたりするなど、高度な学びの内容となっています。

GICが創設されて4年、現場では具体的にどのような教育が行われているのでしょうか。その中身を見てみたいと思います。



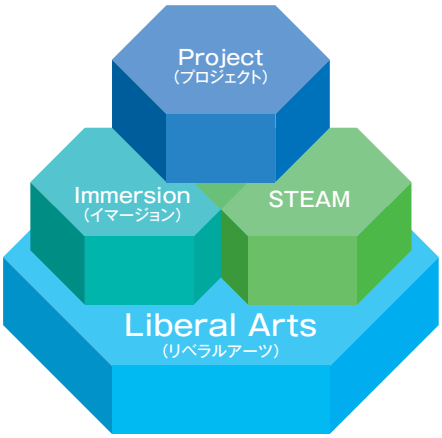
GICは、高校の学年5クラスの中の1クラスで、通常の英語や数学の授業のほかに、「リベラルアーツ（週2コマ）」「イマージョン（週3コマ）」「STEAM（週6コマ）」「プロジェクト（週2コマ）」という4つの独自科目を設定しています。

知識や情報についてなぜそうなのか、本当にそうなのか、という視点にたち、自分自身についても相対化することで既成概念を取り払って考える「リベラルアーツ」。その「リベラルアーツ」の考え方を土台として、英語で社会課題に取り組むオールイングリッシュの授業「イマージョン」と、科学的で論理的に情報を取り扱い、それについて考え、自分なりの答えを表現する「STEAM」があります。またGICには大学同様にゼミがあり、生徒がそれぞれ自らの興味関心に基づいてゼミを選択し、そのゼミの中で自分の研究を行います。これが「プロジェクト」です。

これらを通じ、高校の在学時からものごとの本質を見る視点を養い、社会課題に向き合い、仲間と協力して自分なりの答えを導き出す体験をします。

聖学院中高は基本的には中高一貫校ですが、GICのみ高校募集を行い、内部進学生と高校入試で入学した生徒の両方で構成されています。

GICの独自科目



&Talk

特集 **聖学院高校GIC** ―その根幹にリベラルアーツあり―

既成概念を脱ぎ捨てて自由な視点でものを見る
やりたいことがあるから知識が身に付く
全てを疑い、問い続ける
いずれ世界に貢献していくであろう生徒たちは、
学びの本質を身につけていました

伊藤（いとう） 大輔（だいすけ）

1981年、聖学院高等学校卒業。東京神学大学大学院博士課程前期修了。銀座教会（東京）などを歴任し、現在は渋谷区代官山にある本多記念教会牧師。また、青山学院大学高等部などで非常勤講師を務める。2021年4月より第13代聖学院中学校・高等学校校長として着任。

土屋（つちや） 遥一朗（よういちろう）

聖学院中学校・高等学校国語科教諭。GIC独自科目「Liberal Arts」主担当、同「Project」内「哲学―メディア―藝術ゼミ」顧問。〈少年の対話者〉として、生徒の内側にあるものを引き出すことで、彼ら自身が問い、在り方を創造してゆくための伴走を行う。

坂田（さかた） 響（ひびき）

GIC3期生、哲学-メディア-藝術ゼミ所属。「ローレライの港」「詩の箱」など、対話と芸術の言葉について探究を行う。持病による体調不良から現在も学校を休みがちだが、自分の好きなことや、やりたいことをより明確にするため活動を続けている。

市川（いちかわ） 大紀（ひろのり）

GIC3期生、哲学-メディア-藝術ゼミ所属、「ローレライの港」メンバー。そんな肩書きを羽織ってはいるが、本当は何なのだろうか…。ある人物に出逢い、問うことを愛してしまった。問うことは己の生命線であり命綱。世の中の事象全てに疑問符をつけたい。

李（い） 暻遠（きょんうぉん）

GIC3期生、哲学-メディア-藝術ゼミ所属、「ローレライの港」メンバー。気ままに生きて十数年、「このまま生きては地獄行き」と思い立ち、信じることについて研究中。自身の問う動機に自問自答の日々を送る、プロフィールに書く肩書きのない16歳少年。

2022年度から高校の新学習指導要領が実施され、その中には「学校教育には、子どもたちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め、知識の概念的な理解を実現し、情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められている。」と書かれています。従来の教科の枠組みでは捉えられない学びが必要になってきているのです。

聖学院では創立以来一貫して社会のあり方、人間のあり方を問い続ける教育を実践してきました。2021年に誕生したGICでは独自科目として、物事の見方や考え方の技法を学ぶ「リベラルアーツ」を設置しています。そこではどのような学びが展開されているのか、GICのリベラルアーツについて、学校長の伊藤大輔先生、リベラルアーツ担当の土屋遥一朗先生、土屋先生のゼミに在籍する坂田響くん、市川大紀くん、李暻遠くんの5名にお話をうかがいました。

一見正しいと思われることにも必ず問いを持つ

――GICはどんなクラスですか？

土屋　「『ものづくり』『ことづくり』を通して世界に貢献する」というのが教育目標です。ただそれがGICの説明になるかというと、そうではないと思います。

伊藤　私は脳を動かすクラスだと思っています。「自分の考え」とアウトプットが問われます。聖学院中高はもともと生徒にアウトプットを求めることが多い学校です。自由度は高いですが、それでも枠組みはあります。GICは、その枠を外すことで、もっと生徒の思考が噴き出してくるのではないかと期待して作られた側面があります。

また子どもたちは、小学校からずっと「科目」という括りで授業を受けてきています。それが社会に出るといきなり知識を組み合わせて考えたり答えたりしなければいけなくなる。しかし、学校ではそういう作業は積み上げていません。だから科目という括りに縛られない学びを、高校から始めようという取り組みでもあります。

今大学は、総合型選抜入試（※1）を取り入れているように、一つの科目だけでは測れない力を求めています。それはすなわち社会がそういう力を求めているということだと思います。大学進学が高校の一つの目標になりがちですが、私たちはその先の社会で強い人間を作りたいと考えています。

土屋　GICに教育目標はあるし、カリキュラムもありますが、何をするのかというところは生徒に委ねられています。名称にグローバルとついていますが、グローバルにはナショナルも内包されているので、必ずしも海外を視野に入れなければいけないわけではありません。あらゆる選択肢がテーブルの上に並べられていて、その中で自分はどうするのか、それを真剣に真正面から取り組んでいるクラスです。

――生徒の皆さんはGICをどういうクラスだと思っていますか？

市川　「世界に貢献する」ことを目標としたクラスですが、みんながみんなそれを目指しているわけではありません。「世界に貢献しよう」と言われると、GICの大半の生徒は「なぜ？」と思います。それは本当に必要なのか、なぜその問題に注目するのか。一見正しそうなことであっても、投げかけられたテーマそのものに疑いを持ち、必ず問う、そういうクラスなんです。

坂田　GICは教科でもゼミでも一人ひとりが自分の興味関心に基づいて行動します。みんなバラバラですが、お互いの興味関心を認め合っているから、それが大きなアクションにつながるし、可能性が広がります。

李　聖学院の「Only One（以下オンリーワン）（※2）」というのは、自分がやりたいこと、好きなこと、自分にしかできないことなのではないかと僕は思っています。GICは独自科目を通して、今まで自分にはなかった視点からいろんなものを見ることができます。それが結

土屋先生が担当する「哲学―メディアー藝術ゼミ」の授業を行う教室にて。本誌には収まりませんでしたが、他にもGICの創設経緯やデザインの定義、破壊的創造、李くんの創作活動など約100分に渡って談義が続きました。

「ローレライの港」：問い、惑い、違和感、哲学。学校では、それを語れる場所は少ない。だが確かに、そうした〈言葉〉を求める者がいる。そんな誰かを探して、自由と対話の空間を開いている。

果として自分の中の「オンリーワン」を見つけることにつながっているのではないかと感じています。

坂田　活動的な授業が多いけれど、机の上の勉強もちゃんとあります。僕は机に向かって勉強することがあまり好きではありません。ただGICでは、自分がやりたいことのために知識が必要となるので納得感があり、机に向かって勉強できるようになりました。

聖学院の「オンリーワン」教育

伊藤　李くんが「オンリーワン」について話していましたが、リベラルアーツを通して「自分は何者か」ということを問い、深く考える経験をしているなと感じました。そもそも「オンリーワン」とは何にも影響を受けていない本当の自分です。聖学院は、それぞれが与えられた賜物を持つ「オンリーワン」であるということを礼拝や授業を通して伝え続けている学校です。他方、「ナンバーワン」について考えると、「ナンバーワン」は他との比較によって存在しています。これは他の誰かに依存し、支配されている状態です。「オンリーワン」は比較を必要としません。他への依存と他からの支配から脱却することで本当の自分が浮かび上がってくる。その浮かび上がってきたものが「オンリーワン」です。例えば、「これが好き」という感覚は自分独自のものと思いがちですが、それさえ実は誰かの影響ではないかと問うことが大切です。自分のことも疑い、問い続けることで依存や支配から自由になり、本当の自分が見えてきます。聖学院で本当の自分を見つけてほしい。そのための問う技法としてリベラルアーツがあると考えています。

技法は切り口であって、大事なのは問うことそのものです。GICには四つの独自科目がありますが、いずれも問うための切り口です。机の上で一生懸命勉強することで問うことでも、机以外の場で問うことでも、どちらでも良いので、聖学院の生徒たちには問い続けることで自由にたどり着いてほしいと私は思っています。

リベラルアーツは他の独自科目の根幹となる学び

―リベラルアーツとはなんですか？

土屋　語義的には「リベラル」＝束縛されていない、「アーツ」＝作り出す技法、すなわち自由になるための技法という意味です。

では何から自由になるのか。聖学院高校のGICの場合は、今までの成長過程で身につけてきたものの見方から、いったん自由になるための学びとしてリベラルアーツを捉えています。身につけてきた考え方、思想、世界観あるいは感覚など今の「自分」を形成しているものがそれぞれにあります。生徒にはまず、そういった無意識に身にまとったものや、自分自身の在り方から自由になってほしいと思っています。また、生徒たちには「世界の見え方を変えよう」と伝えています。リベラルアーツでは、様々な思考的実験を通して、世界の見え方を変え、そのための「視点」を持つことを学びます。その「視点」を土台にして、他の独自科目が創造的に展開されます。その意味でリベラルアーツは、他の独自科目に先立つ、根幹をなす科目と言えます。

またリベラルアーツは実験の場なので、在学中にすべて理解できなくても良いと思っています。この授業を3年間受けることによって、卒業後に「こうすれば自分の世界の見え方を変えられる」と気づいたり、自分とは異なる

リベラルアーツとは？

アメリカにはリベラルアーツカレッジという大学が600校ほどあります。いわゆる総合大学、研究大学は、何か研究をして新しい発見をするのが目的です。それに対しリベラルアーツカレッジは、必ずしも研究成果を目的としません。自分自身の興味関心に従って、学問の垣根なくいろんなことを問うて学んでいくこと自体が目的です。リベラルアーツカレッジを念頭に置くならば、リベラルアーツとはものの考え方を身につけるためのカリキュラムということになります。日本の大学では、最低限必要なものを垣根なく学ぶ一般教養的な解釈として使われることが多々あります。

視点に出合ったときにそれに向き合えるようになれたりすれば良いかなと思って授業を行っています。

背景にある構造へたどり着くために

――具体的にはどういう授業をしているのですか？

土屋　例えば「デザインは人々にどう影響するか？」をテーマにＰＢＬ（※3）を行っています。最初は都市の空間設計や建築などすでに存在する視点で、生徒自身に考えてもらいます。

坂田　その授業の第一回目で校内を回って、人をつなげるデザインと人を分断するデザインを探しました。それにはまず「デザインとは何か？」を理解する必要があります。リベラルアーツは２コマ連続の授業です。普通の授業より時間があるとはいえ、たかだか１００分ぐらいで高校生にデザインが分かるわけがありません。しかしこの課題のためにはその定義が必要だということは理解しています。だからみんなでデザインについて議論しました。

市川　リベラルアーツは、社会で起きていることの裏にある背景、つまり「根っこ」を探す授業というイメージです。ただその根っこを掘り当てるにも色々な手段があって、スコップを使うのか、鍬なのかドリルなのか。知識や情報を自分なりに使って根っこを探している感じです。

李　リベラルアーツについて僕が思うことは、問いが他の授業と全然違うということです。ＳＴＥＡＭだったら問いは用意されていて、その問いにどうアプローチするかを求められます。リベラルアーツは問いを含めて自分で考えることが求められる印象です。

土屋　リベラルアーツでは最初に答えを与えないし、場合によっては問いすらも曖昧です。まず自分で考える。体も頭も五感も動かして考えてみます。それでも行き詰まる。そうしたときに、すでに世の中に存在している知識を使ってみる。その発想にまで、生徒は自らたどり着きます。このことが大事です。デザインの授業で言えば、できれば生徒には実学的なデザインの部分だけではなく、この作り方は人を抑圧しているとか、ここを変えると生きづらかった人たちを解放できるという「実学の背景にある構造」にまでたどり着いてほしいです。しかし、それにはデザインの権力性や政治性、それに関するある種の哲学などの教養が必要です。そこで、生徒の思考がその近くまできたら「実はこれについては先人がこう言っている」と知識を提示し、生徒はそれを吸収し活用します。こうしてミシェル・フーコー（※4）など大学学部レベルの知にも挑んでいます。聖学院高校のリベラルアーツはそこまでを射程に入れています。

――この授業は、一体何をやっているのだろうと思うことはないですか？

坂田　よく思います。このデザインは「何のために？」とか「誰のために？」と自然に疑問が湧き出るので、それに対して自分なりに考えて答えを出します。「それは本当に正しいのか？」とさらに問い続けます。こうして問うことをどんどん重ねていくのがリベラルアーツの本質なのではないかと思います。

「遊んで」考える授業づくりと考えるための「遊び」の時間作り

――今後の展望を教えてください

土屋　リベラルアーツをもっとアカデミックにしたいです。難易度をあげるということではなく、生徒が「遊んで」考えて作っていたら大学の学部レベルの思考が身についていた、というところまで持っていきたいと思っています。その上で「自分はどうするのか？」を高校のうちに生徒に問いたいです。

伊藤　生徒たちにもっと「遊び」の時間を持ってほしいと思っています。今の生徒たちは授業が詰め込まれ過ぎていて忙し過ぎます。授業が終わったらクラブ活動か課外活動があり、我々は生徒に「自由に考えなさい」と言っておきながら、その時間を担保していません。文科省の傾向とは逆行するかもしれませんが、そこは戦わないと聖学院が育てたい人間には育たないのではないでしょうか。そういう時間を生徒に確保したいと考えています。

李　リベラルアーツで学んでいることの本質は、今はまだ自分の中ではうまくつかみきれていませんが、どこかに効いてきているのは感じています。ＳＴＥＡＭやイマージョン、他の科目も含め、それは絶対です。たぶん大学やそのさらに先の社会に出た時にちゃんと生きてくるのではないかと思っています。

（取材日／２０２４年10月）

※1　総合型選抜入試
２０２１年度の入試から導入された入試方式。筆記試験で測れる学力だけでなく他の要素も高く評価されるため、大学側が多様な能力のある受験生を公平に選抜することが目的の選抜方法といわれています。
（参考：https://edu.career-tasu.jp/sp/contents/exam/sogo/outline/index.html）

※2　「Only One」
聖学院中高の教育理念である「Only One for Others」の前半部分。誰もが持っている神様から与えられた賜物のこと。

※3　ＰＢＬ（Project Based Learning）
日本語では「問題解決型学習」「課題解決型学習」などと訳される勉強法です。生徒が自ら問題を見つけ、さらにその問題を自ら解決する能力を身に付ける学習方法のことを指します。
（出典：https://www.epson.jp/products/bizprojector/ekokuban/knowhow/pbl.htm）

※4　ミシェル・フーコー
20世紀を代表するフランスの哲学者。『監獄の誕生』で知られ、「パノプティコン」の概念を用いて現代社会の監視システムを鋭く分析しました。権力と知の関係を探求し、私たちの「当たり前」を問い直す思想で影響を与えました。
（出典：https://mindmeister.jp/posts/Foucault）

GICの独自科目を紐解く

Next Talk

―リベラルアーツの本質を継ぐもの―

リベラルアーツがGICの学びの根幹だとするならば、
STEAM、イマージョン、プロジェクトはそれぞれどのような科目なのか、
また教員はどのような想いで授業を設計しているのか
各教科ごとにお話をうかがいました

STEAM

STEAM教育とは、Science（科学）Technology（技術）Engineering（工学）Arts（芸術・リベラルアーツ）Mathematics（数学）の5領域の頭文字を取り、理数教育に創造的教育を加え、それらを横断的に学び、子どもたち一人ひとりの「知の創造性」を育むことを目指した教育です。身に付けた力で社会の問題を発見・解決していくことが期待されています。文部科学省では教育現場への導入を推奨していますが、どのように授業に落とし込むのかというところは教育現場によって様々です。GICのSTEAMがどのようなものなのか聖学院中高の担当教員の方々にうかがいました。

山本　STEAMは横断的に学ぶことが特徴の一つです。歴史的に見れば、人間や世界を知るために生まれた学問は大きな括りでしたが、教育制度の発展の中で科目という概念ができ、縦割りになりました。それがまた横断的な形の教育となったので、学びの本質に立ち返った印象です。

GICのSTEAMは、高校1年生が美術と理科・情報を学ぶものづくり系、高校2年生は数学・理科・情報で理論を学ぶデータサイエンス系の二つのフェーズに分かれています。

もともと聖学院中高は「Only One for Others」というスクールモットーのもと、体験学習や探究型のPBLが実践されていました。さらに生徒が創造的にアウトプットできる場を作り、より活躍できる学びを進める手法としてGICにSTEAMを取り入れたのだと思います。

伊藤（隆）　GICのSTEAMの美術は、卵と顔料でテンペラ絵の具を作ったり、グループで作品を作ったり実験的な要素がたくさん入っています。

山本　初めのころは、美術のアナログ要素と、理科・情報のデジタル要素の二つをどう融合させるかという議論がありました。今はテンペラ絵の具の技法というアナログから始まり、その後情報や理科で学んだデジタル技術を使って作品のクオリティを上げていくという形で、うまく融合できていると感じています。デジタルツールを使うことで表現の幅を広げ、細かい作業が苦手でも、作品をきれいに仕上げることができるようになります。

伊藤（隆）　薄い板をレーザーカッターで切って重ねていって、立体を木箱の中に作る授業があります。作品用の図案は、液晶タブレットを使ってデジタルで作成します。Photoshop（※1）のレイヤー構造（※2）を学ぶことで新たな視点を得て、作品に反映することができるようになります。このようなところにも、アナログとデジタルの相乗効果があると考えています。

宮　高校1年生でものづくりを通して体験したものを、高校2年生で意味づけをしていきます。聖学院中高の校歌の3番の歌詞にあるように、人間の理想状態を「真・善・美」の三つの方向性で表現して、高校1年生は美（感性）を身につけ、高校2年生で科学的思考を学ぶ理科や、データサイエンスなどを通して、真（真理）と善（倫理）を追究して完成することを目指しています。

GIC創設以前から、聖学院中高にはSTEAMの考え方やエッセンスが存在していました。これからの世界で生きていく生徒たちにとって大事なのは、理系寄りの教科横断的な学びであるという考え方が脈々と続いていて、それがGICにつながっていると感じています。今後はGICから得られた知見を、どうやって学校全体に還元していくのかを考えないといけないだろうと思っています。

川西　私は音楽を担当しています。音楽で音を出すには身体のことを知ることも必要です。また、感情や思いを表現するという側面において、文学による表現や哲学的な要素が関わります。さらに音楽には数学も関わっています。複合的な新たな視点に気づいてほしく、理科の先生と協働して、中学で「理科×音楽」の教科横断型の授業を実施したこともあります。

久保　私はGICを砂場みたいなものだと思っています。山を作る子もいれば団子を作る子もいて、歌を歌っている子がいてもよい。生徒たちがやりたいことを選んで自主的に活動し、自分の生き方やオンリーワンを追い求める中で人間的に成長していくのだと思います。その場所が聖学院であって、その最先端がGICだと感じています。

イマージョン

イマージョンは外国語教育法の一つで、外国語環境を作り、ネイティブの教員のもと他教科を学習することで、外国語に身を浸し、語学力を伸ばす手法です。イマージョンにおいて言語は環境であり手段であるため、テーマや教科の学習に比重が置かれます。聖学院のGICではこのイマージョンをどのように活用しているのか、2名の担当教員にお話をうかがいました。

髙橋　GICのイマージョンは、ネイティブと日本人の教員の二人体制で、SDGsを英語で学んでいます。

小池　週2時間、高校1年生は公民科を、高校2年生は家庭科を、高校3年生は保健を英語で学びます。母語とは違う英語で学ぶことで物事を様々な視点から見ることができます。それによって得られたアイディアがイノベーションにつながります。「GICの『G』＝グローバルだから英語」と思われがちですが、私たちが重視しているのは「GICの『I』＝イノベーション」の方です。

髙橋　私が担当する保健の授業では、1950年代から60年代にかけての公民権運動（※3）にラジオやテレビなどのメディアがどう影響したのか、ビートルズの出現で社会がどう変わったのかというテーマを扱っています。なぜ保健で人種差別を？と思われるかもしれませんが、保健は身体や精神だけではなく社会の健全性についても考える科目です。音楽やメディアに対して、日本人にはあまり差別という視点がありません。この授業では、そういう新鮮な問いが投げかけられます。また生徒は、ネイティブの教員の

話を聞くだけではなく、そのテーマについて自分たちで調べてどう感じたのかを英語でプレゼンテーションします。生徒の英語のスキルに差はあるものの、みんな躊躇することなく英語で発表しています。

小池　私の社会の授業では、ウクライナの戦争を取り上げました。生徒がいくつかのグループに分かれて、グループごとにカザフスタンやエストニアなどのウクライナ周辺国の「日本大使館の役割を担う」というグループワークを行いました。各国が英語でメディア発信をしているので、それをインターネットで調べ、それぞれの国がこの戦争をどう見ているのかを生徒に英語で発表させます。英語の記事を読むことで、日本のメディアでは報じられていないような戦争の見え方が浮き彫りになります。英語を通して今までと異なった世界が見えてくるという気づきを生徒に与えたい。それがこの授業の趣旨です。

　他にも、起業家や社会の第一線で活躍している人に、ゲストスピーカーとして話をしてもらい、最先端の人たちがどんなマインドで何をしているのかを間近に体験させています。

髙橋　今後の課題としては、もう少し生徒同士のディスカッションなどアウトプットの時間を増やしていきたいと思っています。

小池　社会課題やサステナビリティ、または探究学習に関するプレゼンテーションの学外コンテストがいくつかあるので、学びの成果として生徒に応募させることを考えています。生徒のモチベーションや達成感にもつながりますし、総合型選抜等大学入試にも役立ちます。生徒はプロジェクトで自分のやりたいことに取り組んでいます。それに加えてイマージョンでも何か実績が作れれば生徒にとってプラスに働くのではないかと考えています。

プロジェクト

プロジェクトは大学のゼミに近い独自科目です。カテゴリー別の五つのゼミ（10ページコラム参照）があり、生徒はそのいずれかを選択して自分の興味関心をもとにテーマを設定して探究します。それぞれのゼミで高校1～3年生が一緒に活動し、学内にとどまらず社会と関わって活動することが多いのも特徴です。プロジェクトについても、担当の先生方にお話をうかがいました。

伊藤（航）　高校3年間を通じて「あなたは何者ですか？」という問いに答えを見出すのがGICの一つのミッションだと捉えています。それは肩書きや枠組みではなく、経験してきたことをどう自分の中に位置づけ、そこからどんな価値をつくり、どのように社会で発揮していくかというコンピテンシー（※4）的なことです。その青写真を描くのがリベラルアーツで、発揮するための手法を身につけるのがSTEAMとイマージョン、それらの独自科目と自分を結びつけるのがプロジェクトだと考えています。自分と親和性が高いゼミに所属して、自分は何をしたいのか、何に興味関心があるのかを徹底的に突き詰めていく科目だと思います。

久保　私は「宗教・文化」ゼミを担当しています。ゼミには、2021年にミャンマーでクーデターを経験した帰国生の生徒がいます。彼の発案により、今年度はゼミ全体の活動として「ミャンマーを支援している方々を支援する」ことを目標としました。実際には既存のNGO団体を通して、現地の生地や織物を使用した聖書バッグや聖書カバーを制作いただき、これを学内で販売して、売り上げをミャンマー支援のために用いることを計画しています。まずはプロトタイプとして、記念祭でテスト販売したところ、1時間で30個の聖書カバーが完売しました。次回は4月の全校保護者会にて販売予定です。このように一人の活動が全体に広まり、その体験から生徒一人ひとりが自分のやりたいことや自分のオンリーワンと向き合う。そういう流れができています。

川西　私は生活環境ゼミを担当しています。生活に課題を抱える高齢者・子育て世代・外国人などの地域住民の生活が、より豊かで幸せになるためにはどうしたらいいのかを考えることがゼミのコンセプトです。以前、防災をテーマにしていた生徒の一人が、災害発生時の危険度が最も高い地区についてリサーチを行い、地区の町会長さんと協力して、コロナ禍における高齢者のための防災訓練をオンラインで行いました。避難ルートを15分の動画で作成し、避難ルートの認識や把握がされているか検証しました。実施後、「若い人が45分かかる避難経路を私たちが歩いたら何分かかるの？」等、区の担当者に避難経路等に関する様々な質問が出たりしました。決まっていることでも疑問を持ち、本当はどうなのかということを投げかける、そのことの大切さに改めて気づかされました。

伊藤（航）　プロジェクトを通して、生徒は社会とのつながり方を学び、他の人を上手に巻き込むことができるようになります。それも一つの成長ではありますが、私はゼミでの成長とは、言語化しにくいもっと深層のところにあると思っています。私のゼミは起業ゼミなので、商品開発、製造、販売と全ての企業活動を行います。そのためにはまず資金が必要です。生徒はスポンサーを募ったりクラウドファンディングをしたりしなければなりません。その時生徒の中に、本当に資金集めが自分にとって有用なのか、自分がやりたいことなのかというモヤモヤした感情が湧いてきます。そういう葛藤を高校生の時に体験をすることが大事なのだと思います。受験ですぐ役立つというものではありませんが、こういうことが後々の人生で意味を成してくると思っています。

山本　GICの生徒は答えのない問いに向かっていく耐性が強いと感じています。厭わずにちゃんと向き合える。日々様々な科目で答えのない問いにぶつかり、そして悩んでいます。ちゃんと向き合うから悩むのであり、それは各先生が言うように、将来大事な資質になっていくと思います。

（取材日／2024年11月・12月）

宮 隆允

教員となった2009年当初から、「教科横断」と「ICT」を取り入れた授業づくりに関心を持つ。2013年、「理科×ICT」をテーマにしたJST制作の科学番組の監修を務める。現在は、理科·STEAM教育の担当に加え、教務部長、法人ICT部門統括長、生徒会顧問、PTA書記等の業務を担う。

伊藤 航大

聖学院中学校·高等学校社会科教諭。GIC3期生担任。全ての時間でディベートを行う「公共」、論理的思考力·チームで挑む力·課題解決力などを育む学校設定科目「現代社会探究」の授業を担当。

山本 周

2021年東京理科大学大学院理学研究科科学教育専攻修了。同年、聖学院中学校·高等学校にて情報科専任教諭として採用。「ニーズとチャンスが結び付くと人はテクノロジーの傍観者ではなく、主役になる」をモットーに日々活動。現在、情報科主任、校内FabLabの住人。

伊藤 隆之

東京藝術大学大学院美術研究科油画技法材料研究室 博士後期課程修了。聖学院中学校·高等学校美術科教諭。現在中学1年学年主任。中高美術、及び高校グローバルイノベーションクラスのSTEAM、Projectの授業を担当。

髙橋 孝介

飛行機に乗って海外を飛び回ることが大好きな国際教育部部長。保健の授業を通して、海外に飛び出して異国の人や文化に触れることの素晴らしさを高校生に熱弁する毎日。好きなカレーはカツカレー。冬はスノーボーダーに変身。

小池 航太

聖学院中学校·高等学校教諭。英語科、イマージョン教育リーダー。GIC1期生担任。社会科の教員免許も持ち、2021年から高Iイマージョン(Immersion)を担当している。何事も意欲的に学ぶことを心がけている。現在はラグビー部顧問としてラグビーも勉強中。

川西 祐毅

桐朋学園大学音楽学部声楽科卒業。桜美林大学大学院修士課程心理学研究科健康心理学専攻修了。中高音楽、及びGICのProjectの授業を担当。音楽を通して人生の豊かさの引き出しを増やしてほしいと思い、伝統とテクノロジーを組み合わせながら、新たな学びの可能性を探っている。

久保 哲哉

聖学院小学校·中学校·高等学校·青山学院大学·東京神学大学·同大学院を卒業。2010年より経堂北教会伝道師、麻生教会牧師、麻生明星幼稚園園長を経て、2018年より聖学院キリスト教センター主事、2020年4月より聖学院中高チャプレン。

プロジェクト一覧
Project list

●宗教·文化ゼミ
キリスト教精神や宗教的·文化的な角度から「自分は何者か」という永遠の問いに挑む。今年度は「inore design -いのりデザイン-」プロジェクトを立ち上げ、ミャンマー支援(現地の方に聖書カバーの制作を依頼、販売·寄付)を通して隣人愛の実践と平和の実現を目指す。

●貧困vs起業ゼミ
「高校生の起業は、貧困解決の一助となるか?」を命題に、それぞれの考える社会課題解決のために全員が起業する。経済活動を通し、消費者の意識変革を求めたり、衰退する産業を活性化させるための仮説を生成·検証する。

●生活環境ゼミ
生活に課題を抱える高齢者·子育て世代·外国人などの地域住民の生活がより豊かで幸せになるために、また持続可能な社会に向けた資源活用や環境保全のための生活を送るために、私たちができる課題解決アクションや啓蒙活動を考案し、実践·研究する。

●哲学-メディア-藝術ゼミ
世界を知り、自己の一人称視点、自身の位置、文脈を俯瞰し、相対化する。そのうえで、自分自身として問う。その問いを自身の研究や活動、対話によって広げ、深める。それを表現するためのメディアを探し、表現や創作を試みる。そうして当事者として〈在り方〉を表明することで、生きる世界の構造変革を目指す。

●新ゼミ
テクノロジーによって加速度的に変化していく現代。誰もがあらゆるものをデザインできる環境。その中で、「暫定的な正解」を模索し、実験や挑戦を経て、失敗から学ぶ姿勢を育む。

※1 Photoshop
アドビ株式会社が開発している有料の画像編集ソフトです。
(参考:https://www.grand-design.jp/illust/blog/591/)

※2 レイヤー構造
レイヤーとは層、階層のこと。Photoshopのレイヤー構造とは、編集対象となる写真に同サイズの透明なシートを被せて、そのシートにペイントをしたり、別の写真を貼り付けたりして、一枚の写真に見せるように仕上げるための構造を指します。
(参考:https://www.luzzstudio.com/blog/photoshop-layer/)

※3 公民権運動
1950年代後半から60年代前半に活発となったアメリカの黒人の基本的人権を要求する運動。
(出典:https://www.y-history.net/appendix/wh1604-004.html)

※4 コンピテンシー
優れた成果を創出する個人の能力·行動特性のこと。
(出典:https://www.nri.com/jp/knowledge/glossary/lst/ka/comptency)

輝く人たち 2

［在校生の活躍］

生徒会役員会

女子聖学院中高　高校1年生

生徒会役員会の高校1年生メンバー

寄付に対する新たなイメージを与えたい

今年の女子聖学院の記念祭で、生徒会の高校1年生役員たちがチャリティ企画としてマラウイコーヒーの販売を行いました。

マラウイ共和国はアフリカ南部に位置する内陸国で、独立以降、戦争や内戦を経験していないことからWarm Heart of Africa（アフリカの温かい心）という愛称を持っています。しかし、開発途上国であり、生産性の低い作物の農業に従事しているため、満足に食事をとれない子どもたちの多い貧しい国です。

「ウォームハーツコーヒークラブ」という、マラウイ産フェアトレードコーヒー販売によるマラウイの給食支援事業があります。中心となっているのは聖学院中学校の卒業生で、NPO法人せいぼじゃぱんの理事長を務める山田真人（やまだまこと）さんです。山田さんから女子聖学院中高に企画が提案され、生徒会役員会での実施を検討していましたが、案件が予想以上に多く一度はあきらめようと考えました。しかし、「ぜひ、私たちがやりたい！」と高校1年生から声が上がり、記念祭でのチャリティ企画が実現しました。販売収益はすべてマラウイの給食支援として活用されますが、今回の販売では、61,000円を売り上げ、4,000食分の給食を賄うことができました。

寄付について、実施している団体や活動への理解が足りないことからマイナスのイメージを抱いてしまうケースが少なくありません。生徒や保護者、教職員など多くの人に寄付やチャリティの意味を正しく伝えたいと考え、生徒会では、今後もこの活動を続けていくといいます。今回のチャリティ企画によって、寄付とは支援される側への一方的な支援ではなく、自分たちも世界の現状を知ることにつながり、活動に共感し、学びを得る機会であるという新しい価値に気がついたからです。

今後の具体的な活動としては、チラシやSNS、プレゼンテーションを通しての啓発活動を行い、来年の『第120回記念祭』では10,000食の給食支援を目標にコーヒー販売を実施したいと、その意気込みを語ってくれました。

●PROFILE

生徒会役員会は、会長、副会長、議長、副議長、書記、副書記、会計、副会計、補助委員で構成され、学校生活をより良いものにするための様々な取り組みを行っています。

具体的な活動内容としては、合唱コンクールなどの学校行事の運営、クラブ委員会の統括、学校説明会への協力等があります。

生徒会役員会は「自立して社会に貢献する女性」を率先してめざす模範生になることをビジョンとしています。

記念祭で販売されたマラウイコーヒー。

TOPICS

生徒会役員会バッジ

取材した皆さんに生徒会参加の動機を尋ねると、「小学生の時に参加した学校説明会で、キャンパスを案内してくれた生徒会の先輩に憧れて」「生徒会で活動をしている同級生を素敵だと思って」という意見が聞かれます。生徒会役員が身につけるバッジへの憧れもあるそうです。

ユーザーサポートから
運用の提案まで対応する
ICTの専門家

支える人たち

聖学院を外から支えてくださっている人たちに
聖学院への想いをうかがってみました。

No.
11

NTTアドバンステクノロジ株式会社
小見山（こみやま） 崇（たかし） さん

1999年、NTTアドバンステクノロジ株式会社に入社。2020年4月から駒込エリアでのICT業務委託が開始。2024年から駒込キャンパスに加え、さいたま上尾キャンパスも業務範囲として、週の半分をそれぞれのキャンパスにてICT業務に従事。

ICTを活用して、子どもたちに社会で求められる力をつけてほしい

現在、教育の現場にはICT（情報通信技術）が広く普及しています。タブレットで学習者がお互いの意見をシェアしたり、離れた場所で授業を受けたり、様々な形で活用されています。聖学院には、学院全体のICTの専門部署として情報センターがあります。その情報センターと一緒に聖学院のICTをサポートしているのがNTTアドバンステクノロジ株式会社（以下NTT・AT）です。NTT・ATの小見山崇さんにお仕事の内容についてうかがいました。

「NTT・ATは、ICT全般を取り扱い、システムやネットワークの構築からトラブル対応までワンストップで対応するサービスやトータルソリューションを提供する会社です。聖学院には私を含め四人のスタッフが常駐し、聖学院全体のICTに対応しています。私たちの主な業務は、ネットワークにトラブルが起きたときに調査して対処したり、ツールの使い方の相談にお答えしたり、生徒児童が使うデバイス（情報端末）のメンテナンスをすること等です。問い合わせは情報センターに集約され、情報センターメンバーと一体となって私たちが対応しています。今、各校個別に使っているツールを統合して業務の効率化と経費削減を進めようという動きがあり、情報センターと一緒に取り組んでいます。このようなツールの運用を設計していく業務も私たちの仕事です。

ICTを活用すると、時間の使い方を変えることができます。面倒な作業をツールで効率化することで、考えたり発想したりすることに時間とエネルギーを使えるようになりますので、考える力を身につけるためにもツールを使いこなす知識とスキルが必要になります。AIが人間に代わっていろいろなことをしてくれる世の中ですが、だからこそ人間でなければできないことは何かが問われていると思います。」

小見山さんの会社では、入社する方は文系出身者も多く、専門的な知識は就職してから学んでいるそうです。「探究心と責任感と、あとはコミュニケーション能力。この三つがあれば社会に出てから必要なスキルは身につけられると思います。」と小見山さんは言います。考える力、ICT、探究心等、聖学院の教育に通じるところがたくさんあるお話でした。

まだまだあります！

Seig NEWS

学生も生徒も教員も職員も
次のステップへと
日々新しい試みをしています。

聖学院大学

聖学院みどり幼稚園

2024年「クリスマスツリー点火祭」を より広く、地域や一般の方々と分かち合いました

大学HP News

11月20日（水）、大学キャンパスでは待降節（アドヴェント）の始まりの時期に恒例となっている「クリスマスツリー点火祭」を実施しました。コロナ禍中は縮小されましたが、今年は学生や教職員、共催の聖学院みどり幼稚園や聖学院教会のみならず、より多くの地域の方々にクリスマスシーズンの到来を知らせるために、点火祭を以前よりさらに拡大しキャンパスを開放して開催しました。

当日はあいにくの雨で、例年の総合図書館前のヒマラヤ杉イルミネーションへの点灯セレモニーは、チャペルでのキャンドル点灯礼拝に替えての実施となりました。午後からは「クリスマスマーケット」と題して学内でクリスマスに関連する数々のイベントも開催され、たくさんの地域一般の方々の来場があり、クリスマスを祝う雰囲気が以前にも増して広く分かち合えていました。

聖学院中学校・高等学校

女子聖学院中学校・高等学校

聖学院小学校

聖学院幼稚園

3校1園合同 聖学院駒込 クリスマスツリー点火式を開催

11月19日（火）聖学院中高講堂において、聖学院中高、女子聖学院中高、聖学院小学校、聖学院幼稚園合同の駒込クリスマスツリー点火式が開催されました。小学校ハンドベルクラブの前奏、小学校宗教委員による招詞（しょうし）、児童聖歌隊の賛美、女子聖学院中高・聖学院中高宗教委員長による聖書朗読に続き、山口博聖学院長よりクリスマスのメッセージが語られました。一同で「あら野のはてに」を賛美した後、幼稚園年長組の聖句暗唱と共にツリーに明かりが灯ると、会場からは拍手と歓声があがりました。クリスマスを祝う各校・園のイルミネーションは1月6日（月）まで毎日点灯します。

聖学院大学大学院

関根清三 大学院特命教授が 令和6年秋の叙勲において 「瑞宝重光章」を受章しました

関根清三 大学院特命教授（東京大学名誉教授）が、その長年にわたる教育研究功労が評価され、令和6年秋の叙勲にて「瑞宝重光章」を受章いたしました。瑞宝重光章は、国及び地方公共団体の公務、または公共的な業務に長年にわたり従事して功労を積み重ね、成績を挙げた方に日本政府より授与される勲章です。11月6日（水）に皇居で行われた伝達式において内閣総理大臣より勲章・勲記が授与されました。関根教授は、2022年度に文部科学大臣より文化功労者としても顕彰されています。

関根清三（せきね・せいぞう）
特命教授

※学校法人聖学院はグローバル・コンパクトに署名・加入し、SDGsを目指した活動を行っています。
※SDGs…2030年までの実現をめざし掲げられた、17の目標と169のターゲットからなる「持続可能な開発目標」

聖学院大学総合研究所

柏木昭先生の教えを紡ぐ会が開催されました

ソーシャルワークの日本における羅針盤となり、数多くのソーシャルワーカーを生涯牽引し続けてこられた柏木昭先生（大学・総合研究所名誉教授、2023年12月ご逝去）を偲び、その教えを紡ぎ続けていくための研究会が、10月12日（土）に大学チャペルにて催されました。柏木先生の教え子や関係の教員ら39名が参加し、先生の大切な教えや言葉、想いなどをあらためて共有する会となりました。

聖学院中学校・高等学校

宇宙エレベーターロボット競技大会全国大会へ出場!!

10月6日（日）に中央大学附属中学校・高等学校で開催された「第11回宇宙エレベーターロボット競技大会関東オープンA」のグローバル中高生部門に出場したチームが、見事6位入賞を果たし、11月23日（土・祝）の全国大会へ出場しました。

また、10月6日のリージョナル中高生部門に出場したチームは3位入賞を果たしています。

聖学院中学校・高等学校

女子聖学院中学校・高等学校

サイエンスアゴラ2024に出展しました

10月26日（土）・27日（日）、お台場にあるテレコムセンターで開催された、科学技術振興機構（JST）主催のオープンフォーラム『サイエンスアゴラ2024』に聖学院中学校・高等学校、女子聖学院中学校・高等学校が出展しました。聖学院中高、女子聖学院中高は2つのブースに出展し、聖学院教育デザイン開発センターが運営するDX教育ユニット、GX・SX教育ユニットに所属する生徒を中心に、プレゼンテーション、デモンストレーション、ワークショップなどのプログラムを実施しました。

女子聖学院中学校・高等学校

記念祭で生徒会役員生徒が「マラウイコーヒーチャリティ企画」に参加

11月2日（土）・4日（月・祝）、創立119周年「記念祭」が開催されました。

今年の記念祭では、生徒会役員たちが「NPO法人せいぼ」との協力を通じて、マラウイの子どもたちへの給食支援を目的とした「マラウイコーヒーチャリティ企画」に参加しました。この企画への参加を通して生徒たちはフェアトレードや社会貢献の重要性について理解を深めました。また寄付がどのように現地で活用されているのか、支援がどのように実現されているのかを学ぶ機会となりました。今回の記念祭でのチャリティ企画の売り上げは、約4,000食の現地の子どもたちの学校給食となります。今後もこの活動に取り組んでいく予定です。

女子聖学院中学校・高等学校

女子聖学院の伝統 合唱コンクールの美しい歌声

10月31日（木）、チャペルを会場に、中学、高校でそれぞれ合唱コンクールが行われました。コンクールはクラス別に課題曲と自由曲によって競われ、クラスごとに特色のある発表が行われました。生徒たちは限られた時間の中で、指揮者・伴奏者・パートリーダーを中心に真剣に練習を重ねてきました。

優勝クラスは以下の通り。その他の順位については女子聖学院のホームページで発表しています。

<高校>課題曲：讃美歌270番「信仰こそ旅路を」
優勝　1年1組「COSMOS」
<中学>課題曲：讃美歌310番「しずけきいのりの」
優勝 3年3組「裸の心」

聖学院小学校

2024年度作品展を開催しました

10月22日（火）～25日（金）、「個性の実を咲かそう～あふれ出る色彩と物語/伝える、気持ちを…」というテーマで、聖学院小学校作品展を開催しました。1年生は「はらぺこあおむし」、2年生は「ジャックと豆の木」、5年生は「どうぞのいす」など、物語をテーマに各学年が作品を作り、ディスプレイにも工夫を凝らして展示しました。テーマは同じでも、作り手の思いが個性となって一つひとつの作品に表れています。今年は聖学院幼稚園の園児も小学校を訪れて、お兄さんお姉さんたちの作品を見学しました。

聖学院小学校

心をあわせて音を奏でる「音楽会」

11月15日（金）・16日（土）の2日間、聖学院中学校・高等学校講堂で「音楽会」を開催しました。15日は子どもたちがお互いの演奏を聴き合い、16日はお家の方に演奏を聴いていただきました。全員がこの日のために練習を重ねてきた合唱や合奏を、心をあわせて披露しました。15日には聖学院幼稚園の園児も客席に座って音楽会を見学しました。

1年生は元気な声で、3・5年生はパートに分かれてハーモニーを響かせ、2・4・6年生は楽器の演奏など、今この時でなければ出せない音を精一杯奏でました。児童聖歌隊やPTAコールシャロン、教職員の合唱など盛りだくさんのプログラムで、最後に全員で「もみじ」を歌って終了しました。

聖学院幼稚園

収穫感謝礼拝

11月15日（金）、神様からいただいている恵みに感謝する「収穫感謝礼拝」が守られました。ホールにはたくさんの野菜や果物が並べられ、子どもたちは園長先生のお話を聞き、神様や作物を育ててくださる方々へ感謝する時間となりました。お昼はホールに全学年揃っての会食。お野菜たっぷりの豚汁給食でした。「おいしい！」「おかわりしたい！」という子どもたちの声や笑顔が園内に溢れ、収穫を心から喜ぶ特別な1日となりました。

聖学院幼稚園

お店屋さんごっこ

11月8日（金）、「お店屋さんごっこ」が開店しました。年長組が店員さんとなって、お客さんの年少・年中組をお迎えしました。品物は全て年長さんやお家の方も手伝ってできたものです。アクセサリー、おめん、電車屋さんなど様々なお店が並び、お客さんの子どもたちは目を輝かせていました。お友だちと協力しながら接客をがんばる年長さん、お買い物を楽しむ年少・年中さんで園内はにぎやかで楽しいひと時となりました。

聖学院みどり幼稚園

みどりフェスタを開催

11月2日（土）にみどりフェスタが開催されました。バザーとして開催していた時から続く手作りコーナーや蔵出しコーナーなどの他に、今年は企業協賛グループが多く参加し、ランチやお菓子の販売、多言語読み聞かせや手作りワークショップなども実施され、さらにフェスタが充実しました。同日の開催となった聖学院大学のヴェリタス祭にも、幼稚園からワークショップコーナーやみどりっこコーナーとして出店。園で採れた野菜の販売や、クリスマスオーナメント作りが大盛況でした。

聖学院みどり幼稚園

プレイデー

10月12日（土）、恵まれた天候のもと、プレイデーが行われました。プレイデーは子どもたちが日頃から取り組んでいる遊びの延長です。子どもたちは、仲間や保護者の方々とともに、楽しみにしていたプログラムに取り組みました。温かい雰囲気の中で行われるこの行事は、それぞれの子どもたちにとり、今の姿を大切にされながら、みんなに応援してもらえる大事な機会です。保護者の方々は、子どもたちの日常の遊びや興味の深まりを見て、子どもたちのこれからの姿を想像することができたのではないでしょうか。

Information

法人事務局移転のお知らせ

日頃より学校法人聖学院と法人に連なる各学校・園のために、多くのご支援を賜っておりますことを心よりお礼申し上げます。
この度、学校法人聖学院は、法人と学校間の連携を進め法人組織の合理化を図るために、駒込キャンパスの新館の法人事務局を東京都北区中里3-12-2（女子聖学院中学校高等学校内）に移転いたしました。
聖学院に連なる教職員一同、聖学院121年の伝統を引き継ぎ「神を仰ぎ 人に仕う」のスクールモットーの下で、これからもキリスト教の愛の精神に基づき一人ひとりを大切に育てる教育を進めてまいりますので、引き続きご理解とお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

学校法人聖学院 理事長 小池茂子

Information

聖学院発祥の地の記念碑建立について

今春、120周年を機に発足したプロジェクトチームが聖学院の発祥の地を特定しました。現在その地に記念碑を建てるために事業を進めています。予定より少し遅れていますが、年度内に建立できる見通しです。建立の際はその様子をwebにて報告する予定です。

編集後記

昨今、「急激に変化する社会に対応して…」などとよく耳にします。聖学院は以前から、「変えることのできるもの・できないもの」を見極めることを大切にしてきました。それらを見極めるには、その前提となる「変化」とは何なのか、その本質を理解する必要があります。
古代ギリシアの哲学者が残した言葉「万物は流転（るてん）する（世界は絶えず変化し続けている）」。 うん、確かに。 あれ？ でもそれは本当？
じゃあ「万物は流転する」という言葉自体は変化（流転）しないの？
聖学院高校のリベラルアーツは、こんなふうに疑問に思ったら立ち止まり、既成概念を取り払い、前提を疑い、徹底的に問い、考えていく授業です。これを高校生のうちから体験するのです。
皆さんも、日常の中で当たり前と思っていたことにふと疑問が生じたとき、立ち止まり、考えてみる時間を作ってみませんか。（Pman）

第5回

聖学院SDGsコンテスト

フォト&ムービー部門

「教えて あなたのSDGs ―環境について考えよう―」

受賞作品発表

SDGsコンテスト［フォト&ムービー部門］概要

- ●応募期間　2024年7月18日～10月3日
- ●応募方法　2024聖学院ウェブサイトSDGsコンテスト応募専用フォーム
- ●受賞種別　最優秀賞（1名）／優秀賞（2名）／佳作（3名）／広報センター長賞（1名）
- ●応募対象　聖学院で学んでいる方々・卒業生・保護者・教職員・聖学院関係者
- ●審 査 員　石原康男（フォトグラファー）、武本 花奈（フォトグラファー）、江崎聡子（聖学院大学准教授）、佐藤慎（広報センター長）

学校法人聖学院が主催する聖学院SDGsコンテスト。
毎年SDGsにつながる写真や動画を募集して行われています。今年もフォト&ムービー部門のコンテストを行いました。
第5回となる今回、環境にテーマを絞り作品を募集したところ、35作品の応募がありました。
応募作品は写真・動画と応募時のコメントで審査されます。審査によって選ばれた7作品をご紹介いたします。
※ウェブにてフォト&ムービー部門の受賞作品概要・審査員講評なども公開しています。右の二次元コードからご確認いただけます。

［最優秀賞］
望まない循環

A.M. さん

〈応募時コメント〉
息子が学校の研修でフィリピンを訪れ体験した「環境問題に配慮せず投棄されるゴミと、そのゴミを拾って生計を立てる人々」についての社会問題。その話を聞いて、かつて日本でもゴミを直接埋め立てて社会問題となっていたことを思い出し、今では憩いの海浜公園となっている東京湾の埋立地を訪れました。ゴミでできた埋立地にゴミが散乱している様子は、フィリピン同様にとても皮肉な風景に映りました。

［優秀賞］
天日塩

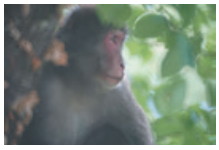
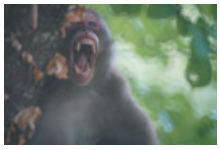
堀　花帆　さん（親子合作）

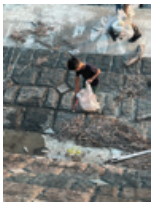
〈応募時コメント〉
夏休みに親子で塩づくりをしました。カツオが美味しい高知県の中土佐町という場所で、海水をくみ上げ、太陽光だけで塩を作るお話をうかがい、自然のありがたみを感じる事ができました。山と海に囲まれた場所で、夏はハウス内が80℃以上になる日もありますが、1日3回ハウス内に入るそうで、1度作業をするだけで体重が2キロも減る過酷な環境とのことでした。体が熱くなるので、川で体を冷やすそうです。休日は雨の日だけ。自然の恵みを最大限に生かした塩は、ミネラルが豊富で、カツオのたたきやアイスクリームに付けると美味しいことも教えていただきました。全て手作業の為、大量生産できないとのことでしたが、ご主人の塩づくりに対する想いを沢山の方々に知っていただき、ぜひ味わってもらいたいと思いました。

［優秀賞］
地球の仲間とともに（連作）

倉橋　基　さん

〈応募時コメント〉
街をぬけ出し、ひさしぶりに森の中へ。
小さなテントを建てて、大地にねそべる。
遠い空をながめていたら、となりの木の上にも、遠くを見つめる地球の仲間。
大きなあくびをしてみたら、となりの木の上にも、あくびしている地球の仲間。
そろそろ街へと帰るころ、森のこみちを、親子で帰る地球の仲間。
住んでいる場所はちがうけど、ふるさとはみんな同じ、大切な地球の仲間。
陸のゆたかさを守るために、地球の仲間とつながろう。



［佳作］
まもりたいきれいなうみ（連作）

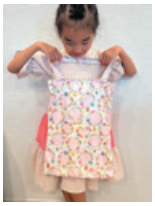
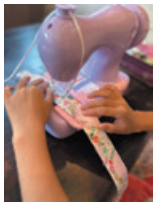
藤山　俊之介　さん
（親子合作）

［佳作］
公園

五十嵐　健太　さん

［佳作］
海からの贈り物

竹村　美智子　さん
（親子合作）

［広報センター長賞］
マイバッグ（連作）

丹波　瑚乃　さん
（親子合作）

Seigakuin University & Schools SEIG

Special edition

聖学院歴史探訪

特別編 ニーバーの祈り

聖学院大学チャペル カリヨン塔

ニーバーの祈り

神よ、
変えることのできるものについて、
それを変えるだけの勇気をわれらに与えたまえ。
変えることのできないものについては、
それを受けいれるだけの冷静さを与えたまえ。
そして、
変えることのできるものと、
変えることのできないものとを、
識別する知恵を与えたまえ。

ラインホールド・ニーバー（大木英夫 訳）

THE SERENITY PRAYER

O God, give us
serenity to accept what cannot be changed,
courage to change what should be changed,
and wisdom to distinguish the one from the other.

Reinhold Niebuhr

アメリカ人神学者のラインホールド･ニーバー（1892-1971）によるこの祈りが日本でも広く知られるきっかけとなったのは、留学先のアメリカでそのニーバーに師事した神学者で東京神学大学名誉教授、学校法人聖学院名誉理事長の大木英夫（1928-2022）氏が、帰国後に「中央公論」誌上で紹介したことによります。

この祈りは現在「ニーバーの祈り」として知られ、依存症患者支援団体などでも使われています。また、現代日本の著名人、歌謡曲や映画などにも度々引用され、多くの人々に共感と慰め、そして生きる力を与えています。

学校法人 聖学院
理事長／小池　茂子　院長／山口　博
〒114-8574 東京都北区中里3-12-2　Tel 03-3917-8351
ホームページ https://www.seig.ac.jp/　E-mail pr_h@seigakuin-univ.ac.jp

■さいたま上尾キャンパス

聖学院大学
・政治経済学部／政治経済学科
・人文学部／欧米文化学科　日本文化学科　子ども教育学科
・心理福祉学部／心理福祉学科
学長／小池　茂子　創立／1988年　〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1-1　Tel 048-781-0925

聖学院大学大学院
政治政策学研究科／文化総合学研究科／心理福祉学研究科
創立／1996年　〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1-1　Tel 048-780-1801

聖学院みどり幼稚園
園長／赤田　直樹　創立／1978年
〒331-0045 埼玉県さいたま市西区内野本郷820　Tel 048-622-3864

■駒込キャンパス

聖学院 中学校 高等学校
校長／伊藤　大輔　創立／1906年
〒114-8502 東京都北区中里3-12-1　Tel 03-3917-1121

女子聖学院 中学校 高等学校
校長／安藤　守　創立／1905年
〒114-8574 東京都北区中里3-12-2　Tel 03-3917-2277

聖学院小学校
校長／佐藤　慎　創立／1960年
〒114-8574 東京都北区中里3-13-1　Tel 03-3917-1555

聖学院幼稚園
園長／田村　一秋　創立／1912年
〒114-8574 東京都北区中里3-13-2　Tel 03-3917-2725

●インターネットでの寄付のお申し込みについて

クレジットカード（JCB、VISA、MasterCard、アメリカン・エキスプレス、ダイナースクラブ）での寄付が可能です。下記URL、QRコードにアクセスください。

https://www.seig.ac.jp/asf/

住所変更・広報誌の発送停止・PDF配信への変更・お問い合わせ

https://www.seig.ac.jp/asf/contact/

学校法人聖学院ASF事務局

Tel 03-3917-8530（月～金 9:00～17:30）